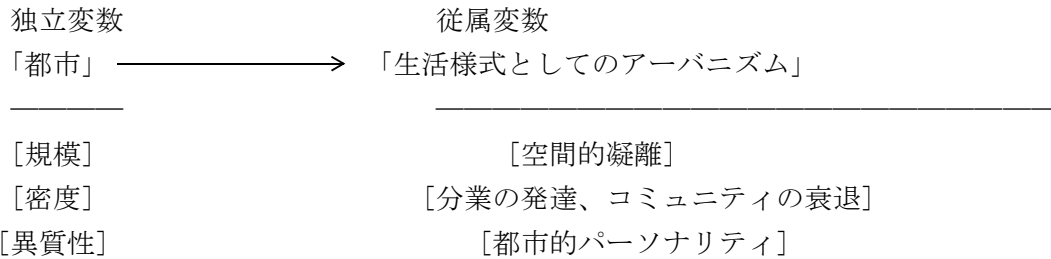


7. アーバニズム理論の批判——コミュニティ存続論と社会構成理論

(1) アーバニズム理論批判の論理



●従属変数に対する批判

「都市的社会関係と都市的パーソナリティ」は事実に反する。
 コミュニティ衰退論（社会解体論、大衆社会論）ではなく、コミュニティ存続論を支持する実証研究が相次ぐ（→都市コミュニティ研究）。

●独立変数に対する批判

「都市」だけから、都市における生活様式を説明するのは無理。
 都市の社会構造（階級・階層構成や性別・年齢構成など）に関する理論が必要。

(2) 比較都市社会学からの批判

●日本では、ワースの理論が日本に当てはまるのかどうかをめぐって論争があった（都市化論争）。欧米に特殊な理論（近江哲男 1961）か、普遍性がある理論（倉沢進 1961）か。

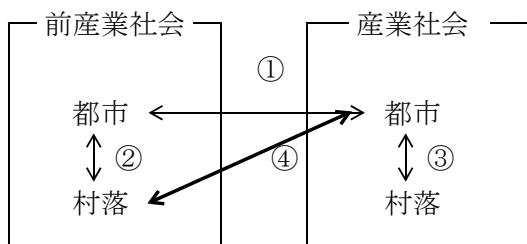
●ショウバーグ『前産業型都市』（Sjoberg 1960）

①都市を規定するものは、テクノロジー、権力、文化的価値、都市（人口の集中）。

②ワースの理論は、テクノロジーの水準の異なる「前産業型都市」には当てはまらない。

●前産業型都市では、（定義によって）近代的なテクノロジーがなく、流動性が低く、しばしば上流階級が都市の中心部を占め、身分構造が厳格である。また、宗教的権威の中心地でもあり、世俗化は進んでいない。

●しかし、前産業型社会の都市と農村を比較していない。また産業型都市では当てはまるか？ ワースに理論には、村落民俗社会から都市産業社会への進化図式が含まれている。



比較都市社会学の分析枠組み

(3) 都市コミュニティ論からの批判

●大都市においても、地域コミュニティは存続している。

● W.F.ホワイト『ストリート・コーナー・ソサエティ』(1943年)

ボストン(イースタン・シティ)のノース・エンド(コーナーヴィル)のイタリア系スラムに関する研究。

スラムもひとつのシステムであるとして、社会解体論を批判。

「中産階級の人には、スラム地区は恐るべき混乱の塊、社会的カオスに見える。しかし、内部の者の眼にはコーナーヴィルは、よく組織され統合された社会システムと映る」(1988, p.xvi 訳 p.94)。

「コーナーヴィルの問題は組織がないためでなく、その社会組織が周囲の社会構造とうまくかみあわない点にある。だからその地域の政治組織ややくざ組織が発達し、忠誠心ある人びとはイタリアとか自分の民族に目が向くのである」(1988, p.273. 訳 p.423)。

「私が予期していたように、まだましなスラム研究の著者のひとりであるルイス・ワースから鋭い攻撃を受けた。彼はまず私にスラムの定義を問うことから始めた。彼の質問の意図は明らかだった。ノースエンドは、実際は多くの結束の固いグループとしてのまとまりを含む、高度に組織化された社会であると私自身ずっと論じてきたので、それ以前のスラム研究の中心テーマであった「社会解体」という概念を持ち出すことなく、私がどのようにスラムを定義できるのか、彼は理解できなかったのだ」(1988,p.356.奥田・有里訳 p.351)。

cf.ワース『ゲッター』、ゾーボー『ゴールドコーストとスラム』

●ハーバート・ガンズ『都市の村人たち』（1962年）

ボストンのウェストエンドのイタリア人街の研究

・ウェストエンドはスラムではなく、低家賃住宅地区。ウェストエンドのイタリア人の生活様式は、労働者階級と下層階級の生活様式。

・ウェストエンドの生活様式は、社会解体ではなく、親族・友人からなる仲間集団社会。（外部社会を信用していない）。

・ウェストエンドの再開発は、スラム問題の解決にはならず、低家賃住宅地区を中産階級向け住宅地区に変えることによって、労働者階級の住宅問題を悪化させる。



現在のボストン中心部、ウェストエンド、ピーコンヒル、ノースエンド

●ジャノウィッツ『都市環境におけるコミュニティ新聞』（1952年）

シカゴの3つのコミュニティ新聞の研究。

・コミュニティ新聞：シカゴのコミュニティ区域に独自に流通する新聞。

区域内の商店からの広告収入で成り立つ個人紙。

無料で配布されることも多い。

・掲載記事：地元情報、地元の自発的結社の行事。地元選出の市会議員の活動紹介。

地域を分裂させるような争点については取りあげない。

マイノリティ・グループ関連の記事は、偏りがないように配慮。

コミュニティ新聞がコミュニティ・イメージを供給。

・読者層：小さな子どもがいる家族、近所づきあいや自発的結社への参加が多い人びと。

実質的なコミュニティ構成員。

・「有限責任のコミュニティ」(Community of Limited Liability) ——自発的な参加による退出自由なコミュニティ。

ゲマインシャフト-ゲゼルシャフトの類型では、現代の都市コミュニティは分析できない。親族や民族などの「原初的絆」にもとづく「自然地域」ではなく、コミュニティ新聞や自発的結社などの機関と、選択的に関与する近隣ネットワークによって構成されたコミュニティとして、都市コミュニティを捉える。

(4) 社会構成理論からの批判

●都市の生活様式を説明するのは、生態学的変数（規模、密度、異質性）ではなく、都市の社会構成（階級・家族周期段階・人種-民族の構成）。

●ハーバード・ガンズ「生活様式としてのアーバニズムとサバーバニズム」（1962年）
インナーシティ、アウターシティ、郊外にわけて、従来の研究を検討。

「1. 生活様式に関して、インナーシティは、アウターシティや郊外とは異なっている。後の2つは、ワースのアーバニズムとほとんど類似性のない生活様式を示している。

2. インナーシティにおいてさえ、ワースの記述に似た生活様式は限られたものでしかない。さらに、経済的条件、生活周期段階、住民の流動性は、人口、密度、異質性よりも、生活様式をずっと満足に説明する。

3. 都市と郊外の物理的その他の違いは、しばしば見かけ上のものであるか、生活様式にとってあまり意味のないものである」（Gans 1962b, p.639）。

「社会学者は、生活様式が都市的だとか郊外的だとかいうべきではない」（Gans 1962b, p.644）。

●独立変数としての「都市」の重要性を否定。住民の社会的属性を重視。

しかし、1)個人属性に還元できない、生態学的要因にもとづく違いもある。

近所づきあいの作法としての「擬似一次的関係」（親しげに振る舞うが深入りしない）。

2)属性からさらにさかのぼって、その構造的な原因（貧困・教育の欠如などの原因）を明らかにする必要がある。

「属性は行動の原因を説明するものではない。むしろ、社会的に生みだされ、文化的に規定された役割、選択、需要の手がかりである。因果分析は、属性からさかのぼって、役割が演じられる状況や、選択や需要の文化的な内容——その達成の機会だけでなく——を規定する、より大きな社会的、経済的、政治的システムにまでたどりつかなければならない。……かくして、インナーシティの剥奪された住民の生活様式の完全な分析は、低所得や教育の欠如や家族の不安定性を示すことでとどめることはできない。これらは、都市経済が低賃金労働者を「必要」としていることや、住宅市場が居住地の選択を制限しているといった条件と、関連づけられなければならない。」（Gans 1962b, p.641-642）。